表紙は語る

クリアオーディオ　トーンアーム+ターンテーブル

TT3+Innovation Compact

¥450,000+¥900,000

アナログレコード再生にかける見果てぬ夢

心技体という言葉がある。心と技と体力が高いレベルでバランスしていることを表すわけで、よく出世したお相撲さんに使われる。これはオーディオのプロダクツにも言えるのではないかと、日頃から思っている。今回の表紙を飾ったクリアオーディオに関していえば、まさにその心技体が充実したブランドだと実感する。

心の部分で言えば、総帥のロバート・スッチー氏は限りなく音楽とアナログオーディオを愛する方であるし、技で言えばそのプロダクト群を見れば一目瞭然、先代の物理学者ピーター・スッチーの教えを守りながら、魅力的な製品を開発し続けている。体の部分は、我が国ではあまり認識されることが少ないが、世界的に見ればナンバー1といえるほどの総合アナログ機器メーカーである。それは自社ブランドのカタログ数に留まらず、OEM供給の多さも周知のとおり。

その同ブランドの、心技体の充実を物語るのがこのトーンアーム、TT3である。フラッグシップであるTT2もそうだが、今となっては珍しいリニアトラッキングアームである。アナログ盤の信号をカッティングするカッティングレース(旋盤)の、カッターヘッドと相似形の動きをすることにより、通常のアームに起こるトラッキングエラーを排除できる、理想のアームと言われる形式だが、簡単そうに見えながらとても難しい、オーディオにとっての見果てぬ夢であった。B&Oのベオグラムを始め、パイオニア、テクニクス、ヤマハ、ダイヤトーン、エミネントなど多くのメーカーが参入するも、結局は、バリアブルピッチに追随する、平行移動メカニズムの難しさに撤退していった。摩擦を極小にしたスライドメカや、エアベアリングによる摩擦フリーのメカ、角度検出サーボモーターによるメカなど、アナログ時代ならではの知恵と技術を競ったわけだが、そんなに面倒ならデジタルでということでCD時代になってしまった。

その見果てぬ夢を実現したのがクリアオーディオ。まさに心技体が充実した今の同社ならではのことだろう。アームの原型は、米国のサウザーである。かつて個人的にも憧れた、究極の、といわれたアームだ。ロバートさんはこのアームを正式に継承し、自らの理想を投影し、持てる技術力とクオリティで、新たなモデルとして進化させ、タンジェント・トーンアーム(TT)として世に送り出した。素材技術と精度維持により、メカニズムをシンプルに構成し、トラッキングエラー・ゼロ、インサイドフォース・クリアというアナログ再生の理想を、このデジタル全盛の時代に実現したことには驚かざるを得ない。そこには特殊なメカもなければ、光学系やセンサー、モーターもない、スタンドアローンで使える潔さが一般のファンにも夢を見させてくれる。詳細は次号以降の、田中伊佐資さんの記事やテストレポートに掲載するが、一足先に表紙でご覧頂きたい。

10年くらい前、ロバートさんと一緒に食事をしたことがあった。その時彼は、今を予測して、「今後残るのはファイルオーディオかアナログオーディオ」といっていたのを思い出す。今まさにその通りになりつつあるのは慧眼というべきか。